巻頭言

子育ては自然と文化の出会うところ

浜田寿美男

私たちはみな、その人生を「子ども」から始めます。それは単純で素朴な事実なのですが、そのことが、案外、大きなことではないかと、最近、しきりに思います。

実際、私たちは、気がついてみると、もう「子ども」ではないところを生きていて、身の回りを見渡せば、世の中は、すでに長い歴史の中でつくられてきた文化の所産にまみれています。その文化を括弧に入れて、世の中を見ることは簡単ではありません。ところが、胎内から生まれ出たばかりの子どもは、母の身体という自然に育まれ、そこから生み出された自然そのもの。丸裸で、何一つ文化的なものを身にまとってはいません。人の出発点は、みな、そこにある、そう考えてみると不思議な気がしてきます。

もちろん人間の場合、丸裸の身体のその自然そのものの中にも、文化の存在が予定されています。そもそもこの世に生まれたばかりの人間の赤ちゃんは、単独の生活者としては圧倒的に無力で、これを支える周囲の大人抜きには一日として生きることができません。赤ちゃんは母親によってお乳を与えられ、産着にくるまれ、安全な家屋に囲われ、時に応じて周囲の人々に抱きかかえられ、負ぶわれて移動する。それが「子どもである」ことの免れがたい条件です。つまり子どもは、文化をまとった大人とのセットで、この人生を始めます。大仰な言い方になりますが、それが子育てというものです。

言い換えれば、「子育ては自然と文化が出会うところ」。当り前のことですが、そのことを確認することで見えてくることがいろいろあるような気がします。

人間は、自然が敷いた生命の道程に重ねて、ここ十万年の歴史の中で言葉を生み出し、道具の世界をつくり出してきました。おかげで人間はどんどんコミュニケーションの世界を広げ、今やインターネットを通じて地球規模の膨大な情報の流れにさらされるようになっていますし、恐ろしいほど多種多様な道具・機器をこの世界に送り出し、かつては考えられなかったほどの商品と欲望を身の回りに振りまき、それに取り付かれたかのようにして生きています。

しかし、この文化のプロセスは、もともと自然のプロセスから離れて成り立ったものではありません。文化はいわば自然の周囲をくるむようにして大きくなっ

てきました。たとえば人も動物である以上、食べ物を食べなければなりません。それは自然のプロセスです。しかし、その食べ物の採取を自然まかせにするのではなく、農耕や牧畜として自分のほうから計画的に生産する、それが文化です。あるいは、口に食べ物を入れて咀嚼する食行動は自然そのものですが、人はそのレベルを超えて、いろいろな食べ物を集め混ぜ合わせて調理し、食具を使って食事をします。人間社会では、食事の文化が自然の食行動をくるむようにして、多様に広がってきたのです。

育児もまた同じです。人間が人間になる前から、もちろん親は子を産み、子を育ててきました。その子育ての基本は自然に支えられたプロセスです。そしてこの自然のプロセスをくるむようにして、育児の文化が多様につくられてきました。赤ちゃんに衣類を着せ、オムツをあてるのもそうですし、乳の出ない母には乳母が代わり、あるいは母乳の代替物を考えたり人工乳を開発したりするのもそうです。また抱っこやおんぶにしても、自然のあり様を超えた多様性が、人間にはあります。育児の自然を、育児の文化が分厚くくるんでいる。それが人間の育児です。

生まれてくる赤ちゃんは、まだ文化をまとっていない新鮮な自然。子育てとは、いってみれば、この新鮮な自然とのつき合いです。現に、赤ちゃんという自然と出会い、つき合うやり方が、どの共同体にも育児の文化としてあって、通常は、

子どもを産む年齢になれば、誰もがその文化を身に染み込ませています。実際、子どももまだ小さいころから、自分より後に生まれてきた赤ちゃんと出会い、その自然とのつき合いを、大人たちの所作から見よう見まねで身に付けるもの。それが育児文化として共同体の中で共有されてきました。

ところが、この近代になって産業構造が大きく変化し、賃労働を軸に核家族化が進行して、世代構成の形が大きく変わった結果、育児の文化と自然との間に奇妙なずれが生じ始めています。たとえば、かつて育児文化をごく普通に身に染み込ませていた育児の共同体が、私たちの周囲から次々と失われています。そして今では、自分が子どもを産むまで赤ちゃんを抱っこしたことがないという女性も珍しくなくなっています。赤ちゃんという自然とのつき合い方を知らないまま、赤ちゃんを産み、不安な中で育児を始めざるを得ない母親たちが出てきているのです。子どもの虐待なども、大きく見れば、その結果の一つなのかもしれません。

園庭で小さな子どもたちが群がって、遊びたわむれている姿を見ると、還暦を越えた私など、すっかりおじいちゃんの気分で、いまだ「自然のうち」なるこの生き物たちが、不思議なほど愛おしく思えるのですが、一方で、そうした牧歌的な気分に浸れない現実が世の中にはあるのだと、しばしば思い知らされます。幼児教育の意味を、そのあたりから再考することが必要な時代に入っているのです。

（奈良女子大学）